

東京 見聞録



今月の炬火

坂東 眞理子氏

昭和女子大学学長

ベストセラー『女性の品格』の著者であり、昭和女子大学の学長として社会で活躍できる女性の育成に努める坂東眞理子さん。その大学運営の方針を、女子教育に夜明けをもたらしたと言われる昭和女子大学の歴史や、女子大学ならではの存在意義と共に伺った。

ベストセラー『女性の品格』の著者であり、近年も旺盛な著作活動を続けている坂東眞理子さん。

一九四六年富山県に生まれ、東京大学卒業後、六九年総理府入省。九八年女性初の総領事に就任、二〇〇一年には内閣府初代男女共同参画局長に就任。現在は昭和女子大学学長、理事長を兼務する。

経歴は先頭に立って女性を社会進出へと導くイメージだが、会った印象は至って普通の女性だ。

「出勤は自転車か徒歩。主婦をして、おばあちゃんもしている。身近に感じるとよく言われる。東大生時代には東大生らしくない、公務員時代にはお役人らしくないと言われていた」と微笑む。

さて、女子教育に夜明けをもたらしたと言われる昭和女子大学。同大学は一九二〇年に設立され、二〇二〇年の東京五輪の年には創立一〇〇周年を迎える。トル

ストイヤタゴールなどの詩人が行った、知識だけでなく「愛と理解と調和」の精神を身につける教育を理想として設立。そこには第一次大戦終結直後、戦争と破壊を行う男性よりも、あらゆるものを育む女性を育て、新しい平和な社会を創りたいという創立者・人見圓吉氏と妻・緑氏の考えがあった。

当時、女性は夫を支え、良い子を育てることを通して社会貢献するという考え方が一般的だった時代。女性が高等教育を受けることに対して社会は冷ややかだった。しかし創立者は良き妻、賢い母親になるには教養を身につけ、平和のために尽くせる人間にならなくてはならないと考えたという。

「私の母は明治末の生まれだが、女性は姑に従うのが一番大事で、本を読んでいると怠け者だと言われたと聞いている。そんな時代によく創立者は女性の高等教育